研究ノート

『近世叢語』における梅園逸話

白井　淳三郎

三浦梅園の伝記で現在もっとも流布しているのは、吉川弘文館の人物叢書『三浦梅園』と大分県先覚者シリーズ第一集『三浦梅園』で、両者ともに故田口正治氏の執筆である。古いものでは明治時代のジャーナリスト西村天囚の『学界の偉人』に載っている伝記がある。この書物より更に古いのは、文政十一（一八四八）年に刊行された岡藩儒、角田九華の著わした『近世叢語』の中に、梅園の逸話が七ケ所ばかり散見される。幸か不幸か、この書物は明治以来百十数年間、未だ一度も刊行されていない。近来、梅園研究がもり上がりを見せているにも拘らず、容易に入手不能なるに付、浅学をもかえり見ず、敢て読み下し文を作り、大家の御批判を乞う次第である。

第一話

三浦梅園、先人の墓、舎の南数百歩にあり。壮歳に拝謁すること日に三度、老いに至り日に二度。以って常となし、寒暑風雨といえども、その数を欠かさざるなり。

第二話

三浦梅園、名は晋（ススム）字は安貞、攣山（レン）と号し又洞仙と号す。豊後杵築の人なり。父の名は義一、医を業とす。梅園幼にて穎敏、綾部綱斉に従って学ぶ。年十七にして、豊前中津にゆき藤貞一の門にあそぶ。以って俊才と称す。常に天地造化の理を窮めんと欲し、これを思いて得ず、寝食を怠るにいたる。年三十にして始めて天地に条理あるを知る。即ち曰く。天地は唯これ一気物なり。気の外に物なし。物の外に気なし。一条の妙理、宇宙を貫徹し、玄界は際なし。神化は測られざるなり。これより志ますます堅く、学いよいよ進み、玄語十余万言を著わし、陰陽消長の度と気物融化の道を論ず。又贅語を著わし、その余蘊をつくす。いわゆる二語は未だ性命の理に及ばず。即ち敢語をつくり以って、先聖の道をのぶる。これより梅園三語という。かって曰く。「既に玄あり。故にこれを贅という。然りといえども、既に天地あり。玄また贅なるのみ。」と。

第三話

梅園みづから節倹を奉じ、あまりあれば必ずほどこし、又米銭を醵し、歉歳（凶年のこと）には貸出し、豊年には息を入る。これにより飢寒をまぬがるる者多し。孝子、順孫、節婦、忠奴の湮滅し、聞く者なし。梅園、称揚をなして、これ等をあらわす。あるいはこれを官に告げ、褒賜を得しめ、あるいは、これを郷邑につのり以って救助をなし、又みづから米塩をおくり、日月相給し、而うして奉養し、跌（てつ）なからしむ。閭閻（リョエン）（村里の身分いやしい者）の子弟に、小善あれば、必ずほめ小悪あれば必ずいましめ、ためにこれを以って、人みなその厳をはばかり、その恵（ケイ）をなつかしみ、これに感服することはなはだし。到れば、あるいは合掌し、拝謝す。かって十数村民あり、連合して騒擾し、まさに城府に入らんとす。梅園もろもろを塗（道路）に要し、解喩すること再三なり。事すなわち平らぐ。又神祝と寺僧と訟（うった）え、党を結んで相仇す。県吏、制するあたわず。梅園又間に入って、これを解く。これより郷邑の争訟おおく就いて決をとる。

梅園つとに嘉遯（隠退）をたっとび、諸侯の累を避け、みな辞す。天明癸卯（西暦一七八三年）、杵築侯あらたに立ち、梅園を召見し、待するに家老の礼を以てす。これより進見する毎に、政治をはかり、眷遇（ケングク）まちまち優なり。寛政元年（西暦一七八九年）年六十七で没す。梅園あらたに一家言をなし、みづから条理学と称す。かたわらに詩を能くし、書を能くす。著わす所、三語の外、詩轍・寓意・梅園詩集あり。二子ありて長男は黄鶴、字は修齢、父没せるの後、家を興し郡宰となり、儒職をおさむ。次男は玄亀、字は大年なり。

（以上『近世叢語』巻の一より）

第四話

三浦梅園　重厚にして、涼静なり。未だかって疾言、遽色なし。一日僧と談じ、たまたま迅雷の庭樹をふるわすのに会う。僧愕然たり。梅園従容として曰く。師また一驚を喫するか。僧に愧色あり。

（巻の四）

第五話

三浦梅園　人の書を請うあれば、多く恥を知れの二字を与う。けだし、いましめなり。

（巻の五）

第六話

三浦梅園つとに嘉遯（カトン）（隠退生活）をたっとび、常に陶弘景・韓康伯の人となりを慕う。諸侯の累を避け、みな辞す。かって詩を作り、その志を述べて曰く。

樵渓不与世間通　樵渓世間ト通ゼズ

高臥東山異謝公　高臥ノ東山謝公ト異ナリ

占得烟霞吾已老　烟霞ヲ占得シテ吾已ニ老ユ

清風鶴唳白雲中　清風鶴唳ハ白雲ノ中

（大意）

きこり道のような村道は、広い世間とは通じていないので、ここは世間とは離れた別天地である。山中に住んでいるが、中国の東山にかくれ住んだ謝安石とはちがい、私は仕えようとは思わない。（謝安石は、のち招かれて司馬炎に仕えたが……）霞やもやの中に住んでいる内に、私は年老いてしまい、清らかな風に乗ってくる鶴の声を白雲の中で、聞いている。

又いわく。

擲金付大鑪　金ヲ擲（ナゲウ）ッテ大炉ニ付ス

不問復如何　問ワズ復タ如何ト

軽裘緩帯春風中　軽裘緩帯　春風ノ中

昇平久浴堯恩波　昇平久シク浴ス堯ノ恩波

人間三島満架書　人間ノ三島満架ノ書

階前豊草絶掃除　階前ノ豊草掃除ヲ絶ツ

県吏為我取直廉　県吏我ガ為ニ直ヲ取ルコト廉ニ

為我安眠護我盧　我ガ安眠ノ為我ガ盧ヲ護ル

君不見富春山中遁栄者　君見ズヤ富春山中栄ヲ遁ルル者

羊裘間釣大澤魚　羊裘間ニ釣ル大沢ノ魚

釣台幸有伸足地　釣台（チョウダイ）幸ニ足ヲ伸バスノ地有リ

焉戴人禍上人車　ナンゾ人ノ禍ヲ戴セテ人ノ車ニノボラン

終身つかへず。

（巻の六より）

第七話

三浦梅園　攣山に隠居す。天明中、杵築侯あらたに立ち、梅園とまみえんことを欲す。而うしてこれを労するをはばかり、その入城を待つ。梅園これを聞いて曰く。故なくして寵を受くるは、我が志にあらざるなり。山を出でず。その後止むをえざるあり、ひそかに出ず。杵築侯これを聞き、即ち路に召見、寝礼、優渥、乙夜（午后十時）に待す。辞去すれば、近臣燭をとって前導し、その山に帰るや給するに厩馬を以てす。これより進見するごとに、即ち政務を語り、眷注いよいよあつく、恩責はなはだ重し。かって別野に宴し、命じて、その記をつくる。詩をたまわって、相贈る、春色は白雲長しと曰うに至る。

（巻の七より）

なお、参考までに、片山東離のえがいた梅園先生肖像に賛した帆足萬里の一文を紹介しておく。

峨眉の山、高峰雲をすぐ。先生を降生し、英儁（エイシュン）群を越ゆ。天地を洞覧し、鬼神を殫極し条理ノ説数十万言、幽頤を闡発し以ってこの民を覚す。属々聘命（ヘイメイ）を辞し、志を遂げ、玄をまもる。遺像、粛然として、その人を想見す。

戊辰二月　帆足萬里拝讃

最後に『近世叢語』の著者、角田九華の小伝を故大島豊南氏の文章によって、追記しておく。

「角田九華、名は簡、字は大可、通称才次郎、九華はその号なり。大阪岡藩邸の計吏、仲島体治の子なり。天明四年生。安政二年十二月死す。年は七十二才。幼にして孤となる。

富商　傑屋某、その学を好むを愛し、資を給し、中井竹山に学ばしむ。岡藩の医師　角田東水、その子の放逸にして獄にくだるに及び、九華の才を奇とし、養うて子とす。下士に列せられ漸次昇進、声挙一世に高し。温厚にして、如何なる寒暑風雨の時と雖も、聴く者一人あらば、必ず醇々として講説やまず。佐藤一斉の如きも、常に九華先生という。文化の初、藩政紊乱

の時、田能村孝憲と屢々封事を献じ、執政の非をあげ切諫したれども、藩侯その人を得ず、一学究におわらしめたり。著書に近世人鏡録、孔子履歴、史記通、大学通、学庸集説、近世叢語、続近世叢語、あり。」

梅園三語の外、梅園著書の主なるものを参考までに列記する。数字は巻数、その下は文体、次は内容である。

死生譚	一	和文	人の生死
造物余譚	一	和文	人体の解剖
身生余譚	一	漢文	人体の生理
丙午封事	一	和文	藩主への進言
価原	一	和文	経済論
豊後跡考	一	和文	豊後史跡
五月雨抄	二	和文	天主教批判
東遊草	一	和文	参宮日記
帰山録	二	和文	長崎旅行
梅園叢書	三	和文	随筆
梅園拾葉	三	和文	〃
梅園後拾葉	一	和文	〃
梅園拾英	一	和文	〃
愉婉録	一	和文	婦人の教へ
養生訓	一	和文	養生の道
塾制	一	和文	塾のきまり

詩轍　六　和漢　詩の作り方

独嘯集　一　漢文　詩集

春遊草　一　漢文　〃

梅園詩集　二　漢文　〃

梅園詩稿　一　漢文　〃

梅園法読　一　和文　本の読み方

参考文献　『近世叢語』「続近世叢語」は大分図書館の所蔵、田口正治著『三浦梅園』『三浦梅園の研究』、三浦頼義著『少年少女のための三浦梅園伝』、「梅園研究」各号、「梅園学会報」各号、『梅園全集上下』、「三浦梅園書簡集」

（[redacted]）